

## William Dwight Whitney: アメリカ言語学の開祖

林, 哲郎  
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796050>

---

出版情報 : 言語科学. 14, pp. 1-18, 1978-03. 九州大学教養部言語研究会  
バージョン :  
権利関係 :



# William Dwight Whitney —アメリカ言語学の開祖

林 哲 郎

## I. 序論——アメリカ言語学史の始源

## II. L S L (1867) と言語科学の認識

### I. 序論——アメリカ言語学史の始源

アメリカ言語学の出発を、それが体系的で実証的な研究にまで発達してきたなかのどの段階に定めるかについては、種々の考え方があるであろう。欧州の諸言語に関するアメリカ人の研究とともに、アメリカ原住民の諸言語に対する認識と研究方法が「科学」の名に値する状態に達した時期を、アメリカ言語学史の始まりと考えることはその一つである。

西洋中世期以来のラテン文法の類型に従った文法研究は、欧州大陸の文献学的伝統を模倣しながら、アメリカ合衆国においても存続していたことは認められる。また、十九世紀の間に、アメリカ国内のインディアン族の言語のみならず、各地の未開人種の言語の研究も、とくに人類学者や宣教師たちによって進められ、豊富な文献の形に整えられていた。<sup>1)</sup> 各種の言語の取扱いが従来の「文献学的な」(philological)方法から、いわば「科学的に言語学的な」(scientifically linguistic)方法へと発展した時期にわれわれは着目しなければならない。

つぎの3種の言語学書が発行された年代は、それぞれに異なった意義を有する言語学史的転機であったということは、一般に認められている。

#### 1. Beginnings of American Descriptive Linguistics

- (i) Edward Sapir(1925), 'Sound Patterns in Language,'  
Language I.
- (ii) Franz Boas(1911), 'Introduction' to Handbook of American Indian Languages, Part I.
- (iii) William Dwight Whitney(1875), The Life and Growth of Language.

これらの著作にうかがわれる言語学的原理や方法論は、アメリカ言語学史上に占めるそれぞれの位置

を決定させるに足るものである。

周知のように、サピア (Edward Sapir, 1884-1939) の論文 (1925) はアメリカ言語学会の機関誌 Language 第一巻に掲載された記念すべきものである。アメリカ的な音素概念の把握と音素に関する構造主義的・機能主義的解釈が、サピア独特の美しい文体によって、そこに明確に示されている。彼の音声理論は心理主義的色彩が濃く、合理的に論証を展開するよりも直観的にとらえた内容を才智の閃めくままに記述していると言う批判は、これまでにたびたび聞かれた。しかしながら、感覚的な音声現象の背後にひそむ音素を心的実在として把握し、音声の特質を全体的な構造型のなかでゲシュタルトとしてとらえた点において、構造主義言語学の主要概念である「分布」という原理をいち早く明らかにしたのである。この「言語における音声構造型」の論文が発表された1925年は、多くの学者によってアメリカ構造主義言語学の誕生の時期とされている。

音素概念の把握、構造主義的観点に立つ言語の記述、さらに言語要素の分布そのものに関する考え方は、すでにサピアの唯一の単行書 Language: An Introduction to the Study of Speech (1921) のなかで示されていた。すなわち、1925年の音声構造型論の萌芽的な見解は、『言語』の第Ⅲ章「言語の音声」のなかの理念的音声論に見られるのである。このように解するならば、この『言語』の時期——1920年ごろをアメリカ言語学史における構造主義的原理の出発と定めることも可能であろう。

言語学史的転機について、もう一つの見解がある。それは、ボーアズ (Franz Boas, 1858-1942) の『アメリカ・インディアン語便覧』(1911) の出版年をアメリカ記述主義言語学の初めと見ることである。この書では、それまで十分に調査されていなかったアメリカ未開人種の諸言語が文献として広範囲にわたって正確に記録され、音声論・形態論に関する真に記述的な原理が明らかにされたからである。この『便覧』の言語科学上の価値は高く、それに付された編集責任者ボーアズの「序論」は、アメリカ記述主義的言語学の最初の憲章と称することができる。そこに展開された言語科学の原理と言語記述の方法論は、サピアの『言語』に大きな感化を与えた。また、『便覧』が、もう一人のアメリカ構造主義言語学の創始者ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) の『言語』(1933) に、原理設定と分析技術の両面において、深い影響を及ぼしたことは見逃がすことはできない。アメリカ原住民語についての共時論的立場からの分析・記述という方法が確立されたと見るならば、『便覧』の出版年である1910年ごろは、記述主義的アメリカ言語学の出発の時期とすることができる。

アメリカ言語学の初期の系譜は、ボーアズ (1911) ——サピア (1921, 1925) ——ブルームフィールド (1926, 1933) のようにたどることができる。勿論、前述の画期的な論文と著書の内容を系統的に概説するだけでは、この言語学史的系譜の真実を十分に証明したことにはならないだろう。

そのためには、少なくとも次に示すような言語学の文献が通時論的に解説されねばならない。ボーズ、サピア、ブルームフィールドによるアメリカ言語学史への貢献が明らかである代表的な論文を以下に掲げておく。

## 2. Formation of American Structural Linguistics

- (i) Boas(1917), 'Introduction' to the first volume of  
I J A L.  
 ———(1920), 'The Classification of American Languages,'  
Am. Anthropologist, 22.  
 ———(1929), 'Classification of American Indian Lan-  
 guages,' Language, 5.
- (ii) Sapir(1916), Time Perspective in Aboriginal American  
 Culture: A Study in Method.  
 ———(1921), Language: An Introduction to the Study of  
 Speech.  
 ———(1922), 'The Takelma Language,' in Boas(ed.),  
Handbook of American Indian Languages, Part II,  
 pp. 1-296.  
 ———(1924), 'The Grammarian and His Language,' Am.  
Mercury, 1.  
 ———(1926), 'Philology,' Ency. Britannica (13th ed.).  
 ———(1929), 'The Status of Linguistics as a Science,'  
Language, 5.
- (iii) Bloomfield(1914), An Introduction to the Study of  
 Language.  
 ———(1922), Review of Sapir's Language; review of  
 Jespersen's Language.  
 ———(1923), Review of de Saussure's Cours de lin-  
guistique générale (Second ed.).  
 ———(1926), 'A Set of Postulates for the Science of  
 Language,' Language, 2.

—— (1927), 'On Recent Work in General Linguistics,'  
Mod. Philology, 25.

—— (1930), 'Linguistics as a Science,' Studies in  
 Philology, 27.

アメリカ構造主義言語学に関しては、従来サピアの「音声構造型論」(1925)が唯一にして真の出発点をなしていたかのような説明がおこなわれてきた。アメリカ言語学会の創設が1924年暮であり、その機関誌等一卷の発行が1925年であったという外的事情も、勿論上述の説明のために重要な意義を与えていた。サピアの『言語』(1921)とブルームフィールドの『言語』(1933)は、それだけでもってアメリカ構造主義言語学の原理と方法を十分に説明している、とする見解も妥当ではないであろう。これら構造主義を解説した古典的著作とされる2つの『言語』は、アメリカ言語研究史という潮流から遊離して、突然に出現したのではなかった。換言すれば、2つの『言語』は、それらが著わされるにいたるまでの学問的経過が背後にあり、それらが著わされた後の言語学的影響が大きかったと言うことである。サピアとブルームフィールドの言語科学をアメリカ言語学史の流れのなかに、記述主義・構造主義という言語思想との関連において、正しい位置づけをおこなうことが重要なのである。

さて、われわれはアメリカ言語学の出発をサピア(1925)からボーアズ(1911)へと、歴史の流れをさかのぼって設定してみた。これからさらに逆行してまず遭遇する言語学の文献は、ホイットニー(William Dwight Whitney, 1828-1894)の The Life and Growth of Language (1875) である。それは、サピアの論文からちょうど50年前の公刊である。ホイットニーはイエール大学サンスクリット文献学ならびに一般言語学の教授として、当時のアメリカ言語学会をリードしていた。この言語学書を中心として、彼がアメリカ言語学の最初期の出発に果たした貢献を調べてみることにする。

十九世紀の言語学史の上で、1875年という年代は特別の意義があるとされている。すなわち、デンマークの言語学者フェルネル(Karl Verner)が「第一子音変化の例外」<sup>2)</sup>という論文を発表して、グリム(Jacob Grimm)の原始ゲルマン語子音に関する音推移の法則<sup>3)</sup>を修正したとされている年である。この時期以後、レスキーン(August Leskien)そのほかのいわゆる青年文法家たちは、音声変化の概括を取扱うのにより厳正な方法を導入するにいたった。ホイットニーはこれら青年文法家たちによる新しい言語研究の運動に理解を示していたと同時に、彼みずからも欧州の言語学思想に大きな感化を与えた。

The Life and Growth of Language (1875)は、実際にはホイットニーの第二

の一般言語学書であった。この書は、それより8年前に公刊された彼の第一の言語学書 Language and the Study of Language (Scribner's Sons, New York, 1867) の内容をより簡潔に述べ、講演調の第一の書を十分に整理した形に書き改めたものである。LGLとLSLの2書は、アメリカが産んだ世界的な文献学者・言語学者ホイットニーをしてアメリカの言語研究を欧州大陸の学界の水準にまで達せしめたのである。ブルームフィールドはその最初の言語学書の序文のなかで、ホイットニーの2書の価値を賞賛したことは当然のことであった。その趣旨は、

「その著者〔ホイットニー〕の見解の明瞭であることと、確証された事実と単なる憶測とのあいだの良心的な区別とによって、今日でもわれわれが承認できないような内容はほとんど含まれていない。」

という評価に十分にうかがわれる。

これに反して、最近出版された言語学史の著者たちは、ホイットニーの学問的業績をかならずしも高く評価しているとは言えない。たとえばイヴィッチの言語学史は、アメリカ学派言語学の先駆者としてのホイットニーについてつぎのように述べている。

「言語研究の伝統は、アメリカ合衆国においては十九世紀の後半に、イエール大学サンスクリット教授W. D. ホイットニー(1827-94)による研究とともに発達しはじめた。ホイットニーの見解は彼の同時代の人たちから高く評価されたけれども、その当時の欧州における言語思想とは通常きわめて同調していて、アメリカ・インディアン語の専門家でコロンビア大学教授フランツ・ボーアズ(1858-1942)の形成に決定的な影響を及ぼすことはなかった。」<sup>5)</sup>

以上の批評とおなじような評価は、レプスキーの構造主義言語学の概観書のなかにも見られる。

「アメリカ合衆国における言語学は、第一次世界大戦以後の時期にいたるまでは、欧州の言語学とはたいして異なっていた。われわれは、十九世紀末ごろにあらわれたW. D. ホイットニーによる言語に関する興味ある通俗書を想起することができる。」<sup>6)</sup>

このレプスキーは、アメリカ合衆国における言語学の将来の発達に重大な影響を与えたのは、二十世紀初期のF. ボーアズの著作であったと述べ、ホイットニーの貢献の内容については言及していない。

アメリカにおける言語学の伝統は、十九世紀後半にホイットニーのサンスクリット文献学と一般言語学の研究から始まった、とするイヴィッチの見解は正しい。彼の言語学的貢献については、つぎの点を考慮に入れて論ずるのが適当であろう。

( i ) ホイットニーのLSLとLGLは、フリーズが指摘しているように、<sup>7)</sup> 十九世紀初葉から開発されてきた印欧語の多様性・親近性・系統についての比較的歴史的研究の成果を彼なりに総括し解釈したものである。

( ii ) ホイットニーの両著作は、レプスキーの批評のように、一般言語学の概説書であって、多

くの読者を対象とした通俗的書物である。

(Ⅲ) ホイットニーの両著作は、イヴィッチが述べているように、当時の欧州の言語学的思想に同調した内容しか有しない。

われわれは以下の考察において、このような批評が正当であるがいなかを吟味しなければならない。

ホイットニーによる記述の基礎となっている言語学的事実や原理について、彼はつぎのように述べている。

「私の議論の基づいている主要な言語学的事実は、過去のいくばくかの間に、比較言語学 (comparative philology) でありふれているとされる言説であり、それらがある特別の出典に拠っていることを示す必要はなかった。」<sup>8)</sup>

ある個人の最近の研究結果を意図的に採上げる場合には、それを指摘するように配慮している。ホイットニーは、比較言語学の研究が達成した学問的成果は多くの人びとの共通財産として整理して提示すると述べている。

また、言語観の基礎とその上部構造に関して調和しない種々の見解が競い合って支持を得ようとしている、と説明したあとで、彼はつぎのように記している。

「一方では自然科学が他方では心理学が言語科学 (linguistic science) を占領しようとしているが、この言語科学は、真実、そのいずれにも隷属するものではない。この書物のなかで示した諸原理は、人間とその制度の研究者のあいだに長いあいだ広くおこなわれてきたような種類の原理である。」<sup>9)</sup>

この引用の前半は、ホイットニーが言語科学を歴史学・精神科学 (a historical and moral science) であると見なす観点に基づいた思想の表明であって、注目すべきである。言語学の原理は、言語を制度の一種とする観点が認められてきた学問のなかで、普及していたものであるとしている。

以上の説明を調べることによって、彼の意図したところが明らかになる。すなわち、彼はつとめて一般に広く容認され、多くの人びとの納得のゆく言語事実を示そうとしたのである。そして、言語学的原理は歴史学・社会科学においてあまねく普及していた種類のものであるということも述べようとしている。特殊の言語事実やある個人の特徴的な見解を提示することは、できるかぎり差控えようとする謙虚な態度がそこにかがわれる。

しかし、言語科学の原理を総括したということ以上に重要なのは、ホイットニーの言語の本質に関する共時論的認識である。言語はその話者たちを離れて考えることはできない、という言語についての共時論的立場に立って、言語を「発話」(utterance) として彼は理解した。この考えは当時の

いわゆる青年文法家たちの思想に深い影響を及ぼしている。たとえば、ジャンコウスキーはつぎのように述べている。「ホイットニーの思考の影響は、他の青年文法家たちにも跡づけることができる。たとえばレスキーンであるが、言語がその話者を離れて考えることができないと主張する場合がそうである。」<sup>10)</sup>

ホイットニーは元来サンスクリット文献学者であり、ゲルマン語族の研究に関しては、単に周辺的な興味しか有しない印欧語学者にすぎなかった。ジャンコウスキーはつぎのように説明している。「ヘンリー・スウィートを除けば、十九世紀のもっとも著名なアングロ・アメリカ人の言語学者ホイットニーは、青年文法家たち、ことにレスキーンが彼に靈感を負うていると称した数少ない外国人学者の一人であった。クルチウスもまたホイットニーの影響を受けた。」<sup>11)</sup> ホイットニーの著作のうち少なくとも前述の2冊は、青年文法家たちによってドイツ語に翻訳され、ドイツで出版されている。Language and the Study of Language は、クルチウス (Georg Curtius) の示唆によりジョリー (Julius Jolly) が訳して、1874年ミュンヘンで公刊された。一方、The Life and Growth of Language はレスキーンにより翻訳されて、1876年ライプツヒヒから発行されたのである。

われわれの興味を惹くのは、二十世紀欧州の構造主義言語学の元祖とされている F. ドソシュール (Ferdinand de Saussure) がホイットニーに関心を示していたことである。あるいはむしろ、ホイットニーの言語観からかなりの影響を受けたと言った方が適切であろう。F. ドソシュールはその著書 Cours de linguistique générale (Paris, 1916) のなかの数ヶ所において、ホイットニーの著作ならびに言語認識に言及している。

まず、第I章「言語学史概説」のなかで、ゲルマン語学者もまた実在に一段と身近かであったために、初期の印欧語学者の抱いた見解とはおのずから異なった見解に到達したと説明して、ドソシュールはつぎのように述べている。

「最初の刺戟を与えたものは、『言語の生』(1875年)の著者、アメリカ人 Whitney である。幾程もなくして新しい学派が勃興した、即ち少壮文法学派 (Junggrammatiker) がそれであって、領袖はいずれもドイツ人であった。」<sup>12)</sup>

これに続いて、ブルークマン (Karl Brugmann)、オストーフ (Herman Osthoff)、ブラウン (Wilhelm Braune)、ジーフェルス (Eduard Sievers)、パウル (Herman Paul)、レスキーン等の学者名を掲げている。そして、彼は青年文法学派の考え方に変化が生じたことに着目してつぎのように述べている。「人は言語を目して、それ自体で発達する有機体であるなどとは考えなくなった；それは言語団体の集団精神の所産である、と人はみる。」<sup>13)</sup> このような言語の性

質に関する理解がいかにかにホイットニーのそれと類似していたかについては、後の章で論ずることにする。

F・ド・ソシュールがアメリカ人学者ホイットニーの言語学書を知るにいたった事情については、ヤーゴブソン(Roman Jakobson)の調査が明らかにしている。ド・ソシュールは1909年の講義で言語学史を論じていた時に、1875年を言語学史上のひとつの転換期であると述べた。前述のように、ホイットニーのLGLは英語版とともにフランス語版(パリ、1875)で発行されていた。この書が上述のように「刺戟を与えた」と言って、新しい言語学派つまり青年文法学者たちの運動が発生したとしているのである。ド・ソシュールは1876年と1877年をライプツヒヒで送っているが、彼の考えでは、当時ライプツヒヒ大学がこのような新しい言語科学の運動の主要な中心地であった。彼は勿論レスキーンの講義を聴いている。そして、少なくともホイットニーの著書のドイツ語訳 Leben und Wachstum der Sprache (Leipzig, 1876) を出版したレスキーンの仲介によって、ド・ソシュールは「この青年文法学派の先駆者たちの案内者」(this Wegweiser of the Neogrammarian pioneers)を知ったに違いない、とヤーゴブソンは推測している。<sup>14)</sup>

さらに『一般言語学講義』のなかの「言語；その定義」の節において、ド・ソシュールはつぎのようにホイットニーの説に批評を加えながら、結局においてこれを承認している。

「Whitneyにいわせると、言語も一の社会制度たること他のすべての社会制度と変りはないのであるから、我々が言語の用具として声音装置を用いるのは、偶然であり、単に便宜のためである：なんら身振を選ぶも亦可、聴覚映像の代りに視覚映像を使っても差支へはなかった。この説が極端にすぎる事は言う迄もない；言語は他の社会制度とすべての点において類似する制度ではない；のみならずWhitneyが、我々の選択が偶然声音器官の上におちたというのは、過言である；その選択は幾分は天性の然らしめる所であつたらう。しかし肝腎かなめの点において、アメリカの言語学者の言うところは尤ものように思われる。」<sup>15)</sup>

言語が社会制度の一種であり、社会の構成員のあいだの約束によって成立つという重要な言語観は、ホイットニーからド・ソシュールへ受け継がれたのであった。

このような社会的な制約としての言語の認識に関連して、言語記号の恣意的な性質というもう一つの根本的な考え方も、やはりホイットニーの洞察であったことは、言語思想史的に重要な意義がある。

「言語が一個の純然たる制度である事ははっきり分らせるために、Whitneyが記号の恣意的特質を力説したことは、極めて当を得た処置である。かくして彼は言語学を正当の地盤の上に据えたのである。」<sup>16)</sup>

この点に関して、ホイットニーは「行けるところまで行かなかった、そしてこの恣意的特質こそ言語を他の一切の制度から根本的に引離すものなることを見逃がした」と言って、ド・ソシュールはホイットニー自身の論考の不十分であることを批判している。

概略的であるが、以上、ホイットニーの言語研究についての現代における評価、十九世紀末における青年文法家たちとホイットニーとの関係、およびド・ソシュールの言語観とホイットニーのそれとの系譜などを調べてみた。彼が科学としての言語学を樹立しようとした熱意が二十世紀十年代以後のアメリカ言語学の発達にどの程度の影響を及ぼしたかを測ることは困難である。確かにブルームフィールドは、彼の学問的業績に敬意を表していることは事実である。サピアとブルームフィールドに始まるアメリカ的色彩の濃い構造主義的言語学は、ボアズのアメリカ・インディアン語研究に直接の源泉を得ていることは言うまでもない。われわれはホイットニーからボアズへの人類学的・言語学的系譜は、可能なかぎりたどらなければならないだろう。

十九世紀末において、アメリカならびに欧州の言語学界に占めていたホイットニーの偉大な地位は、アメリカ言語学の開祖としての彼の役割を十分に意義あらしめるであろう。以下に掲げるのは、彼の LSL (1867) と LGL (1875) の主著以外の重要な論文と著作である。これら文献を考察することによって、ホイットニーの言語科学と言語観をさらに詳細に、具体的に明らかにしなければならない。

### 3. Writings of W.D. Whitney

- (i) — (1876), Languages and Its Study, with special reference to the Indo-European Family of Languages: Seven Lectures. Edited by the Rev. R. Morris (London: Trübner)
- (ii) — (1876), 'Language,' Johnson's Universal Cyclopaedia (New York: Appleton), vol. II, pp. 88-97.
- (iii) — (1879), Sanskrit Grammar (Oxford U. Press)
- (iv) — (1885), 'Philology,' Encyclopaedia Britannica (9th edition), vol. XVIII, pp. 765-780.
- (v) — (1889), 'Preface' to the Century Dictionary: An Encyclopedic Lexicon of the English Language (The Times, London; The Century Co., New York, 1889-1)
- (vi) — (1971), Whitney on Language: Selected Writings of William Dwight Whitney, edited by Michael Silverstein, with introductory essay by Roman Jakobson (MIT Press, Cambridge, Mass.)

## II. LSL (1867) と言語科学の認識

最初の一般言語学書である Language and the Study of Language (1867) の冒頭の章において、ホイットニーは言語科学 (linguistic science) の特質を概括的に説明している。言語科学がきわめて新しい学問であり、十九世紀に発達した研究であると述べ、地質学・化学・天文学などの他の自然科学とおなじように、観察と帰納を主とする科学であるとしている。

彼による言語学に対する科学 (science) としての地位の要請は強くて明確であり、現在における言語学的観点から眺めても、十分に納得のゆくものである。十九世紀以前の化学・天文学とおなじように、言語研究においても「早急な一般化、根拠のない仮説、決定的でない演繹」がゆきわたっていたと言う。これら科学全般について、彼はつぎのように述べている。

「あらゆる場合に、困難というものはほとんど同様であった。それは、観察された事実が乏しく、それに対して研究者が採るところの誤った立場という点に存した。健全な方法を確立し、真正な結果を精密にするために、帰納的な推論の基礎として役立つような現象の十分な蒐集と分類がおこなわれていなかった。これとともに、そしてまた部分的にはその結果として、偏見と假想とが帰納の位置を奪取していたのである。」<sup>17)</sup>

従来の言語研究をふくめた自然科学に対するホイットニーの批判は、このように厳しいものである。彼が、言語科学を自然科学に近い観察と分類を主要な操作とする学問であるとみなして、その科学性を強く求めていることは注目に値する。

言語研究に対する総体的な名称として、ホイットニーは「言語科学」(linguistic science) をもっとも頻繁に用いている。最初の言語学書の LSL の副題が ‘Twelve lectures on the principles of linguistic science’ となっていることも、この語句に重要性の置かれていることを示している。つぎに、「人間言語の科学」(Science of human speech), 「言語研究」(study of language, linguistic study, linguistic investigation), 「言語の科学的研究」(the scientific study of language) の用法がかなり見られる。「言語学」(linguistics) なる語は論述のあちこちに用いられていないことはないが、われわれの予想に反して、‘linguistic science’ はどに熟した使用法となっていない。約15頁におよぶ詳細な ‘INDEX’ のなかで、‘Linguistic science’ は見出し語として掲げているが、‘Linguistics’ は示していないことから考えても、後者に術語としての価値を与えていないように思われる。そして ‘Science of language’ は ‘Linguistic science’ を見よ」となっている。

注意すべきは、「一般言語研究」(the study of language) と「特殊言語研究」(the

study of languages)との用法上の区別をホイットニーがおこなっていることである。前者は無冠詞の‘language’であり、後者は無冠詞複数形の‘languages’である。そして前者の研究の特質についてつぎのように述べている。「それはいたるところにある〔言語的な〕諸事実でなくて、その事実の理由を追求する。それは、われわれがいかに話すかやいかに話すべきかではなくて、いかなる理由で話すのかを尋ねる。人間の歴史の窮極的な事実そのものにまで遡り、かつ人間性の深みそのものにまで降って、そのような理由の探求を続けるのである。」<sup>18)</sup> 要するに、‘languages’の研究は実際の発話の諸言語における実態の分析調査を中心としている。これに反して、‘language’の研究は言語の本質と言語習得過程に見られる観念(idea)と記号(sign)もしくは語(word)との結合など、言語をして言語たらしめている原理の追求を目標としているのである。

言語科学がいかなるものをその資料とし、対象として採り上げるかに関しても、ホイットニーは十分に解説し、論じている。

「言語科学の資料および対象とは言語の全体である。入手できるかぎりのすべての、無限の多様性をもった人類言語の諸形態であって、人間の心や口頭で現在活動しているものも、文献にのみ保存されているものも、数こそさらに少ないが、いっそう永久的な、黄銅、石碑に記録として刻まれてあるものも、すべてが言語科学の資料および対象である。言語科学の分野と規模とは時代的人種の制約はない。外部に知られることの最もすくなく、才能的にもはなはだ恵まれていない人種の方言も、世界史上の指導的人間の方言も同様に、言語科学の関心事である。自分の心の動きを他人に合図するために人間の口からひとつの音声が発せられるときとところには、かならず、この科学がこの音声を細心の検査に値する特質と機能をもったものとして、すすんで取り上げ、研究する。いかなる言語のいかなる事実も言語研究者の見地からみれば、調査を求めている。というのは、全体の光にあててみて始めて、いかなる部分も完全に理解できるからである。」<sup>19)</sup>

ここには、言語科学が取り扱う言語現象の広大な領域が示されており、人類言語の無限に多様な諸相が網羅的に述べられている。

もしホイットニーの言語科学の対象を分類するならば、つぎの3種になるであろう。

- ( i ) 人間の口頭で発せられる「発話」としての言葉と文献・石碑などに記録された書記言語
- ( ii ) 未開人種の言語と文明国人の言語
- ( iii ) 意味伝達のための音声としての言語の特質と機能

「言語の全体」を研究対象とする、と述べるホイットニーの態度は、確かに公正であり、納得のゆくものである。このことは、前述の引用につづくつぎの文章で、さらにはっきりと述べられている。

「言語現象をその個々の部分において、またすべての様相において完全に理解するために、言語現象に関するすべての資料を蒐集し、整理し、説明するのが研究者の努力目標である。」<sup>20)</sup> 彼の態度は、

偏見・臆測・空想を主としていた前科学的もしくは非科学的方法から脱して、広汎な言語資料の「蒐集」、「整理（分類）」、「説明（解釈）」という記述主義的言語研究の方法に従うことにある。これは、前述の「帰納的な推論の基礎として役立つような現象の十分な蒐集と分類」というのとおなじ趣旨である。さらに、このことは、30数年後に文化人類学者ボーアズによって実践される記述主義的・構造主義的原理の先駆的な説明であると見てよい。

以上、科学としての言語学の特質、言語学と言語科学の名称、言語科学の対象と分野などに関するホイットニーの認識と見解を明らかにした。彼の言語観の特色を詳述するに先立って、われわれはアメリカ言語学史の創始期を飾る最初の一般言語学書 Language and the Study of Language (1867) について全体的な説明をしておきたい。つまり、この書の出版にいたる経緯、この書の内容の概観と言語学書としての評価についてである。

この LSL の成立事情については、‘Yale College, New Haven, Conn., August, 1867’ と記された序文の冒頭で、ホイットニー自身が説明している。すなわち、1864年3月の間に、ウォシントン市のスミスソン民族学研究所でおこなった‘On the Principles of Linguistic Science’ と題する6回の連続講演の形において、本書の内容は最初に述べられたものである。この講演内容についての簡単な梗概は、同年に（実は1863年の報告として）発行された研究所年次報告に印刷された。その翌年の冬（つまり1864年12月と1865年1月）に、この講演は、今度はボストン市のロウエル研究所で講習会の一つの授業課程としてふたたびおこなわれ、12回の講演に拡大されたのである。一般読者のまえに提出されたのは、本質的には講演の折のままの内容であるが、印刷出版に際して注意ぶかく書き改められており、かなりの分量が追加されている。ただし、言語理論について注目すべき見解の変更をおこなったのは、本書第十一章に論じられている「言語形成の最初の段階における擬声語的原理」に当てた部分であった。ホイットニーは、この原理に対して見解を改めることにますます高度の有効性を与えるようになってきた、と述べている。

さて、LSL の内容について概観してみよう。冒頭の‘CONTENTS’においても巻末の‘ANALYSIS’においても、綿密な主要内容を示す項目が列記されていて、講じられた言語科学の主題・材料・論述が一見して理解されるように配慮されている。各章の詳しい目次内容のなかの主要項目だけを採り上げて示し、全体を(i)～(iv)部に整理すると、つぎの表のようになる。

- ( i ) 序 論 I 章 序説, 言語科学の歴史・資料・対象, 母国語習得。  
 II 章 言語変化の原因、制度としての言語、精神科学としての言語学。  
 III 章 音声変化と意味変化。
- ( ii ) 言語変化・IV 章 言語の成長, 方言, ゲルマン語族  
 分岐の諸 V 章 方言, 関連性, 印欧祖語  
 相  
 (印欧語) VI 章 印欧語族の重要性, 比較言語学の方法  
 VII 章 印欧語の起源, 根, 屈折語と派生  
 VIII 章 印欧語の特徴//セム語族, アルタイ語族
- ( iii ) 言語変化・IX 章 言語の発生的分類の不確実性, アジア・マレー, ポリネシア・アフリカ・アメリカ諸  
 分岐の諸 言語, 孤立語  
 相  
 (非印欧語)
- ( iv ) 総 論 X 章 言語分類法, 形態論的分類, 言語学と民族学  
 XI 章 言語の起源, 言語と思考  
 XII 章 言語と人間性, 書記法, 英語の地位

以上のように, 言語と言語科学の論考に採り上げられている L S L の多数の項目は, 4 部に整えることができよう。( i ) 序論——言語科学の特質と, 言語とくに音声と意味の変化論, ( ii ) 言語変化・分岐論——方言と印欧語の特徴, ( iii ) 言語変化・分岐論——発生的分類と非印欧語の特徴, ( iv ) 総論——言語分類, 言語起源, 言語と思考と人間性, という内容である。

しからは, この L S L の言語学書としての特徴はどのような点にうかがわれるであろうか。ホイットニーの言語と言語科学に対する認識のなかで特徴的なものに注目し, つぎの項目に分けて列挙することができる。

- ( i ) 言語と言語科学を論ずるに際して, 確証された事実と単なる憶測・仮説とを区別している。
- ( ii ) 言語現象の個々の事実を記述するよりも, その現象をつかさどっている原理を明らかにしようとする。
- ( iii ) 言語科学は自然科学に類似しているように見えるが, 歴史的科学 ( historical science ) であり, 精神科学 ( moral science ) と見なしている。
- ( iv ) 制度の一種としての言語と見る観点に立てば, 言語科学の方法は歴史的であり, 社会的である。
- ( v ) 言語の音声・意味の変化 ( II, III, IV 章 ) を取扱っていて, 歴史言語学的考察に重点が置かれているように見える。しかし, 一方では, 共時論的立場から, 構造的な考察も配

慮されている(Ⅰ,Ⅷ,Ⅸ,X,XI,Ⅻ章)。

(Ⅵ) 母国語(英語)習得の考察から始まって(Ⅰ章)、母国語(英語)の世界中の諸言語のなかに占める地位を結論として論じている(Ⅻ章)。

LSLの言語学書としての総体的な特質を以上のように整理してみた。このような特質が青年文法家や構造主義的言語学者たちの言語思想に及ぼした影響については、さらに具体的な項目に焦点を絞って考察しなければならないであろう。

以下においては、ホイットニーの言語と言語研究に関する認識のなかでもっとも特徴的であり、彼以後の言語学思想に感化を及ぼしたと考えられるものを採り上げて論じてみたい。その一つは、言語科学に与えられた課題の理解であり、これをつぎの2項に分けて考察してみる。

(ⅰ) 言語学者に課せられた任務

(ⅱ) 言語研究者による言語記述の態度

勿論、この2項はそれぞれに深い関連があることが明らかになるであろう。

まず、言語科学の課題を明らかにするため、ホイットニーは言語研究に携わる者の任務について明確な説明を与えている。前述のように、言語科学の対象は文献・石碑等に保存された視覚的な言語資料から口頭で発せられる発話にいたるまで、広大にして多様な人間言語の形態である。この対象全体を言語研究者(linguistic student)は蒐集し、整理し、説明するのがその目標である、とした。そのような研究領域との関連において、ホイットニーは言語研究に従事する者をつぎ3種の範疇に区分している。

(ⅰ) 文献学者(philologist)

(ⅱ) 言語習得者(merelinguist)

(Ⅲ) 言語学者(linguistic student, scientific student of language)

最初の区分の文献学者は「文献記録(literary records)に蓄積されているような人間の思想や知識の研究者」<sup>21)</sup>である。そして、単なる言語習得者は「実際に使用するために諸言語を学習する者」の意味に解している。ホイットニーは、‘linguist’に言語を習得して実用に供する者や多くの言語を流暢に話す人の意味を認めていたがゆえに、‘linguist’と語源的にも関係のふかい‘linguistics’なる語を‘linguistic science’ほどに頻繁に用いなかったようである。

かくして、ホイットニーによれば、真の意味の言語研究者ないしは言語(科)学者は、一方では、その研究領域が文献学者の領域に接しており、また他方では、言語学習者のそれと界を接している。しかし、言語学者はこの両者と親しく援助を交換しながらも、なお両者のいずれとも区別された分野

を扱うものであるとしている。

「彼（言語科学者）は言語を思想の道具、表現の手段として取扱ひ、その記録としては取り扱わない。彼は単純な語（words）や句（phrases）を取扱い、文（sentences）や文献（texts）を取扱わない。彼は言語の内的生命をたどり、その起源を発見し、成長の継続的なそれぞれの段階を追跡し、変化を支配する法則を推論することを旨としている。これらを認識するならば、現在明らかになった言語の相の統一性と種々相が自らに説明されるであろう。これとともに、人間天賦の資質としての言語の性質とその思想との関係、知性の発達と知識の成長へおよびす影響、言語に反映された精神と知識の歴史を理解することを目標としている。」<sup>22)</sup>

文献学者・言語学者との対比において、言語学者の担う課題の輪郭がここに示されていると見てよい。

言語研究者、つまりホイットニーの言う真の言語学者は、前述の引用の内容を分析するならば、言語の理解とその取扱ひ方についてつぎの3項を中心として作業することが解かる。

- ( i ) 言語を思想の道具、表現の手段として扱う。
- ( ii ) 言語の起源、成長、変化の法則を明らかにする。
- ( iii ) 言語と思想の関係、その精神・知識の発達への影響を調べる。

この( i )の趣旨は、彼が言語を「発話」(utterance)として捉え、共時論的立場から考察する必要性を強調していることを教えている。しかし、彼が言語学者は語・句は取扱うのに、文や文献は研究対象外としている真意はどこにあるのであろうか。おそらく、ホイットニーの考えのなかには、文や文献の分析は文法学者(grammarians)の任務であり、文や文献にもっともよく表明される人間の思想を取り扱うのは文献学者(philologist)の課題であるという専攻分野の区分に対する認識が存したのであろう。

しかし( ii )と( iii )に関するホイットニーの立場はどのようなものであろうか。言語変化の問題と言語と精神史の関係とは、確かに、歴史言語学ないしは比較言語学の主要な課題である。前述のように、LSLの全体12章のうちで、第Ⅱ章「言語変化」と第Ⅲ章「音声変化と意味変化」以降第Ⅷ章の前半にいたるまでは、印欧語族を中心とする言語の歴史的推移に重点を置いた解説となっている。言語学は歴史的な科学であり、言語学の方法は歴史的であり語源的でなければならないという信念は、ホイットニーの言語観の基盤に存したことは十分に考えられる。しかし注意すべきは、言語現象の変化に関して、彼は単なる通時論的事実を記述することを最終目標と定めていたのではなくて、それら「変化を支配する法則」を明らかにしようとしていたことである。この点において、ホイットニーが単なる歴史言語学に心酔した学者ではなくて、科学的な言語学者として、言語を共時論的立場からもまた深く考察しようとしていた、と言えるであろう。

言うまでもなく、ホイットニーは言語学者の扱う分野が文献学者の研究領域にまで入りこむことも

あり得ると考えていた。言語学者の任務として、上述の( i ), ( ii ), ( iii )項のほかに、さらにつぎの項目を付加している。

( iv ) 言語は有史前の人類の行為・運命を研究する主要な手段となる。

言語の分派ないしは系統の研究が、人類の区分と文化の諸類型を考察の対象としている人類学( anthropology )や民族学( ethnology )と深い関係があることは勿論である。言語研究が民族学研究の基礎となること、言語そのものに、自然科学的人类学が提供できないような人類に関する情報を含んでいることをホイットニーは理解していたのである。

つぎに、言語科学の説明の仕方とともに言語研究の態度についてホイットニーが意図していたことに触れなければならない。

「われわれがこれから従うとする方法は、可能なかぎり総合的( synthetic )よりも分析的( analytic )であり、独断的( dogmatic )であるよりも研究的( inquiring )な方法である。われわれは、なかならず、明晰をもとめ、既知の明白なものから、いっそう深遠で曖昧なものへと進んでいくことにする。かくすれば、すべての教養ある人が認識できる範囲内にある諸々の事実からの帰納によって原理を打立てることになる。」<sup>23)</sup>

このような趣旨に基づいて、彼は英国民が熟知している資料から彼の説明のための用例を取出した。それは、あらゆる現行の生きた言語のなかに、すべての人間言語に共通する「本質的な事実と原理」を含んでいると見なしていたからである。

「事実からの帰納により原理を確立する」( establishing principles by induction from facts )というホイットニーの方法論は、現在の演繹的な言語理論の立場からは別として、記述主義的言語学の観点からは十分に正当なものであると言えよう。言語学の対象である言語学的事実を重視する実証主義的精神は、彼の言語研究の根底につねに流れていた。多くの人たちの心のなかには、言語という主題に被いかぶさっている神秘性と曖昧さなどが払拭されないままに漂っている。それは、「事実」でなくて「推論」に基づいて言語に関する諸事項をそれらの人びとが取扱うとするからである、とホイットニーは忠告している。

しばしば彼が主張しているように、「偏見」と「仮想」を棄てて、言語的事実の「観察」とそれからの「帰納」によって、真に科学的な言語研究が樹立されることをホイットニーは目指していた。言語学は精神科学の一種であると考えていた彼は、たとえ研究方法は自然科学のそれに類似していても、言語が人間の資質に根ざすものであり、言語と思想の密接な関係を見失うことはなかった。一面から見れば、自然科学的な進化論が学界を支配していた当時において、彼は、言語学を自然科学に毒されていた状態から、精神科学もしくは社会科学の世界へ引き戻そうとした、と言えよう。

注 釈

- 1) Cf. J. R. Firth, 'Atlantic Linguistics' (1949), Papers in Linguistics (1957), pp. 162f.; Harry Hoijer, 'Anthropological Linguistics,' in Horman, et al (ed.), Trends in European and American Linguistics 1930-1960 (1963), pp. 110-113.
- 2) Cf. Verner, 'Eine Ausnahme der ersten Lautverschiebung,' Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, XXIII. 97-130.
- 3) Cf. Jacob Grimm, 'Germanic grammar' from Deutsche Grammatik (Bertelmann, 1893), I, pp. 580-592, in W. P. Lehmann, A Reader in Nineteenth Century Historical Indo-European Linguistics (1967), pp. 46-60.
- 4) Bloomfield, An Introduction to the Study of Language (New York: Henry Holt, 1914), Preface, v.
- 5) Milka Ivić, Trends in Linguistics (Mouton, 1965), p. 152.
- 6) Giulio Lepschy, A Survey of Structural Linguistics (Faber & Faber, 1970), p. 74.
- 7) C. C. Fries, Linguistics and Reading (New York: Holt, 1962), p. 58.
- 8) Whitney, LSL, Preface, vi.
- 9) Whitney, LSL, Preface, v.
- 10) K. R. Jankowsky, The Neogrammarians (Mouton, 1972), p. 171.
- 11) Ibid., p. 169.
- 12) F. de Saussure, Cours de linguistique générale (Paris, 1916), p. 18 (小林英夫訳『言語学原論』, p. 12)
- 13) Ibid., p. 19, 小林訳, pp. 12-13.
- 14) R. Jakobson, 'The World Response to Whitney's Principles of Linguistic Science,' in M. Silverstein (ed.), Whitney on Language: Selected Writings of William Dwight Whitney (MIT Press, 1971), p. XXVIII.
- 15) de Saussure, Cours, p. 26 (小林訳, p. 20)

- 16) de Saussure, Cours, p.110(小林訳, p.102)
- 17) Whitney, LSL, p.2.
- 18) Whitney, LSL, p.10.
- 19) Whitney, LSL, p.6 (興津達朗訳『近代言語学の発達』, p.7)
- 20) Whitney, LSL, p.6(興津訳, p.7)
- 21) Whitney, LSL, p.6.
- 22) Whitney, LSL, p.6.
- 23) Whitney, LSL, p.10.

### 参 考 文 献



- Fries, C.C., 'Advances in Linguistics' (1961), in Allen(ed.),  
Readings in Applied English Linguistics(Appleton, 1964)
- Hymes, Dell(ed.), Studies in the History of Linguistics  
 (Indiana U. Press, 1974)
- Keiler, A.R.(ed.), A Reader in Historical and Comparative  
 Linguistics (Holt, 1972).
- Okitsu (興津達朗訳), 『アメリカ言語学史 1925-1950』(大修館, 1958)
- Okitsu (興津達朗), 『言語学史』(英語学大系第14巻)(大修館, 1976)
- Leroy, Maurice, The Main Trends in Modern Linguistics  
 (Blackwell, 1967), tr. by Glanvill Price.
- Robins, R.H., A Short History of Linguistics (Longmans, 1967)
- Sebeok, T.A.(ed.), Portraits of Linguists: A Biographical  
 Source Book for the History of Western Linguistics  
 1746-1963(Indiana U. Press, 1966)
- Watermann, J.T., Perspectives in Linguistics (Phoenix Books,  
 1963)